

## 魔女狩りと資本主義

本年、没後 100 年を迎えるマックス・ヴェーバー (1864～1920 年、スペイン風邪で死去) の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、周知のように、禁欲的な「プロテスタンティズム」と「資本主義の精神」という、一見関連がないどころか、むしろ相反するよう見える、両者の逆説的関係性を追求した画期的な論考である。プロテスタンティズムの勤勉や節約といった徳性が、統一された行動システムにまでまとめ上げられて形成された倫理的雰囲気 (エートス)、これが意図せずして資本主義文化の発達に貢献したことを、ヴェーバーは論証してみせた。

では「魔女狩り」と「資本主義」との関係はどのように説明され得るのだろうか。両者もまた一見したところでは、関係性が見出しにくい。前回述べたように、シルヴィア・フェデリーチが『キャリバンと魔女』(2004 年、邦訳 2017 年) で取り組んだ最も重要な歴史的問いとは、16、17 世紀に行われた何十万もの魔女の処刑をどのように説明できるのか、そして「資本主義」の出現が「魔女狩り」と同時期であったのはなぜか、ということであった。

### 異端迫害と魔女迫害

魔女狩り (魔女迫害) を考察する際の補助線の一つとして、それ以前から行われていた「異端迫害」が挙げられる。両者には魔女狩りの初期においては連続性も見られるという。たとえば異端のカタリ派は、女性を蔑む教会の見方に異議を唱え、結婚の拒否や出産の拒否をも推奨していた。しかしフェデリーチは、異端迫害と魔女迫害の大きな違いは、魔女迫害においては「性的倒錯」と「嬰兒殺し」に対する告発が中心的な役割を担い、また避妊が悪魔的行為とされたことである、と述べる。1484 年のインノケンティウス 8 世の大勅書 (魔女教書) において、「避妊・中絶・魔女魔術」の連想が初めて登場し、次第に異端迫害は「女性」迫害へと移行し、宗教的・社会的逸脱がもたらした「生殖」にかかわる罪として再焦点化されるようになっていった。一体、それはなぜであろうか。

イギリスの民族学者、マーガレット・マレーは『西欧における魔女信仰』(1921 年) において、魔女たちは、出産と生殖に幸運を呼ぶための古代の豊穡神崇拝の実践者であり、教会はそれを異端の儀式、教会権力に対する挑戦とみなして敵対した、と論じた。マレー説はその後、歴史学者たちからの痛烈な批判を受けることになるが、近年エコフェミニストや「ウィッカ」の実践者によって脚光を浴びてきている。しかしマレーの仮説では、豊穡神信仰自体がなぜ危険なのか、そして魔女狩りが起きたタイミングについての説明ができなくなるという。また、魔女裁判の中で、生殖にかかわる罪が突出している理由として、貧困と栄養不良から生じる 16、17 世紀の幼児死亡率の高さを挙げる説もある。しかしこの説では、魔女が妊娠自体を妨害したことを説明できなくなってしまうという。フェデリーチは、これらの説は、この時期ヨーロッパで高まった「再生産」と「人口規模」という新たな問題と魔女迫害との間の重大な関係を見損ねている、と指摘する。

### 再生産政策としての魔女狩り

注目すべきは、魔女狩りは、封建制の崩壊から資本主義への移行期に行われたということである。初期資本主義時代の経済思想である重商主義は、16、17 世紀に全盛期を迎え、人口規模の大きさを国家の繁栄と力の秘訣と捉えていた。しかし一方、西ヨーロッパでは、1580 年代には人口が減少し始め、17 世紀に入っても依然その

傾向は続いていた。その結果、たとえばフランスとイギリスでは、国家によって出生率上昇を促進する一連の対策が講じられ、資本主義の再生産政策が試みられる。結婚が奨励され、独身者には罰を与える法律が可決された。また、人口動態の記録と、国勢調査が始まり、それらを通して、性行動・生殖・家庭生活の監視という国家の介入が行われた。人口動態の統制は戦略的重要性を持っており、望ましい人口比率を復元するために国家がとった戦略の意図は、女性が自分の身体と再生産に及ぼしていた自己管理能力を破壊することであった。その結果、産児制限や出産を目的としない性行為を行う者は、誰でも魔女とされたという。あくまで仮説ではあるが、フェデリーチは、「魔女狩りとは、少なくともある程度は、産児制限を犯罪化し、女性の身体、すなわち子宮を人口増加のために、かつ労働力の生産と蓄積のために奉仕させようとした企みであった、と説明するのが妥当である」としている。人口減少に悩み、人口の多さが国富であるという信念に動かされた政治家によって、魔女狩りは促進されたといえるのである。

### 「賢い女性たち」

実際に、魔女とされた女性の多くが、産婆を含む「賢い女性たち」(知恵を持ち、薬草を用いた民間療法等に秀でた女性のこと) など、伝統的に女性の生殖に関する知識やその管理を担い守ってきた人々であったことは、以上の仮説を裏付けている。二人のドミニコ会士による『マレウス・マレフィカルム (魔女への鉄鎚)』(1486 年) でも、「産婆や古い女が他のどんな女性よりも悪悪であるのは、母親がみずからの子宮の産物を破壊する手助けをするからだ」と論じられている。従来、賢い女性である産婆たちは、薬草に通じ、出産補助、避妊、墮胎、鎮痛・炎症止めに手腕を発揮し、多くの子どもを無事取り出してきた。例えば、彼女たちは経験知として、止血剤や子宮の収縮剤となる麦角の効能を理解していた。分娩時には自然の摂理に合わせて、痛みを和らげるために薬草を使用したともいわれる。経験知に基づき女性たちに寄り添ってきた産婆だが、やがて男性中心主義的な近代医学によって駆逐されていく、というのが西洋医学史の大きな流れである。サレルノの医学校を除いて、基本的に女性は医学部からも排除された。大学を通じて近代医学を傘下に収めたキリスト教会にとっても、出産時に痛み止めを使用する産婆は、「汝痛みの中で受け入れたら、汝痛みの中で産むべし」という聖書の教を脅かす者であった。資本主義的再生産政策としての魔女狩りに加えて、近代医学やキリスト教によっても、女性の身体の自己管理能力は奪われていったのである。

一方で、大学での主流の文献主義的医学に対抗した、16 世紀の医学者・錬金術師パラケルススは、自分の知識のすべは「賢い女性」から学んだものであると、晩年に述懐している。また、時代は遡るが、キリスト教内の例外的存在として、中世の女性神秘家、ヒルデガルト・フォン・ビンゲン (1098～1179 年) を忘れてはならない。ヒルデガルトは、一連の医学書とキリスト教神秘主義の作品を残し、異端の危険を冒しながらも、女性を墮落した性とみなすキリスト教の教義に反対して、ポジティブな女性像を打ち出したのである。

### [参考文献]

シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女』以文社、2017 年。  
上山安敏『魔女とキリスト教』講談社学術文庫、1998 年。